

# 松村禎三先生との出会い

高橋 みどり

## ～その1 「沈黙」～

私が松村先生にお世話になったのは大学3年生の4月からであった。それは様々な出来事が重なったことによる、まさに偶然の出会いであった。と同時にその頃は、翌年の11月にオペラ「沈黙」の初演を控えているという、そういった時期でもあった。そう・・・どういふ状況なのか、お解かり頂けると思ふ。

4月に先生と初めてお会いして、2～3回目の芸大レッスンの後、お腹が空いたということもあり、根津の吉野家へ5人で入った。芸大キャッスルが開いてなかったのか混んでいたのか定かではないが、学食ではない外のお店に先生と入るのはその時が初めてであった。

お店に入って先生は、あの吉野家の狭いカウンターの上にフルスコアをバサッと広げながら、今現在作曲中であるオペラ「沈黙」のことを、夢中になって嬉しそうに話して下さった。

しばらくして、女子定員が牛丼を運んできたのだが・・・その態度がおよそサービス業とは思えないような対応であった。後にも先にも私は、日本でお店に入ってこのような体験をしたことがない。そのぐらい、本当に失礼な接客であった。

時間帯もお昼時ではなく、先生と我々以外にお客さんは2名位しかおらず、けっして混んでいるわけではなかった。しかし、年齢も私と近かったであろう彼女からしてみたら、客観的に見て我々の光景が異様に映ったのかもしれない。多少はわからなくもないが・・・既に私はこちら側の人間だったので内心驚いてしまった。

そして・・・それ以上にもっと驚いたことは、人によっては怒鳴り散らすであろうこの出来事に対して、先生は眼中にないといった感じで気付いていないのか、もしくは気付いていらしても無視していらっしゃるのか・・・この出来事は何事もなかったかのように・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・スルーして終わった。

その後、お店を出てある先輩が次のレッスン日の確認をした時である。ちょっと間があったと思ったら、最初は小さなお声から・・・徐々にクレッシェンドして行って・・・ついには噴火なさり、強烈な言葉が発せられた。

先生「僕は“沈黙”の作曲がしたいんだ。時間がおしいんだ。なんでこんな暑い中わざわざ上野まで来て、君達にクダラナイ時間を作らなければ or 君達のクダラナイ曲を見なければいけないんだ！」

全員「・・・・・・・・・・・・・・・・(沈黙、沈黙、沈黙、沈黙、沈黙、沈黙)」

実に貴重でスリリングな体験の一つであった。